**P2-38.**

## 頚椎症術後の上肢機能評価－簡易上肢機能評価（STEF）を用いて－

（リハビリテーションセンター）
○松丸　聖太、西野　誠一、太田とし江
　青山　瑠美、上野　竜一

【はじめに】 頚椎症術前後の上肢機能評価については、簡易上肢機能検査（以下、STEF）を用いた文献が散見される。橋本らは術後 2〜3 週に、樋口らは術後 1 ヶ月において有意な改善を認めたと報告しているが、術後 1 週以内という早期の報告は少ない。そこで術後リハ介入前に STEF を施行し、手術効果による術後早期の上肢機能回復過程について調査を行い、若干の知見を得たので報告する。

【目的】 術後早期における上肢機能回復過程を STEF を用いて、更に頚椎症の定量的指標とされる日整会スコア（以下、JOA スコア）との相関についても併せて調査を行った。その結果から介入時期に応じたリハ内容再考や継続的リハの必要性を検討する。

【対象と方法】 平成 23 年 4 月 1 日から 8 月 15 日までの頚椎症クリニカルパス患者 15 例のうち 10 例を対象とした。内訳は頚椎症性脊髄症 5 例、後縦靭帯骨化症 3 例、頚椎症性神経根症 1 例、頚椎椎間板ヘルニア 1 例の計 10 例である。術前と術後リハ介入前に STEF を施行し、その得点を比較検討した。STEF は金子らが開発した上肢機能検査で標準化のための十分な検討がなされている。

【結果】 術後の STEF 得点に改善を認めた。左右別では 10 例中 9 例が利き手である右側に改善を認めた。また、術前 STEF と JOA スコアとの間には相関関係を認めた。

【考察】 術後 1 週以内の早期から STEF 得点が改善した理由として、対象者 10 例のうち 9 例に頚髄圧迫が認められ、手術効果から頚髄圧迫が解除され局所血流改善により即時的な回復が得られたと考える。同時に対象者の半数以上に創部痛、感覚障害残存を認めており、術後リハ介入の効果を高める上で早期には創部痛を考慮して手指巧緻動作や残存する感覚障害改善を優先させるなどの工夫を要する。リハ終了時期及び継続の必要性については今後の課題として更に症例数を増やし、追跡期間を再検討し取り組んでいきたい。

**P3-39.**

## 婦人科がんにおける Cell Search システムを用いた末梢血中循環がん細胞に関する検討

（社会人大学院 4 年産科婦人科学）
○佐々木　徹
（産科婦人科学）
　西　　洋孝、三森　麻子、高江洲陽太郎
　永光　雄造、高木　偉博、佐川　泰一
　伊東　宏絵 、寺内　文敏、井坂　惠一

循環がん細胞（Circulating tumor cell : CTC）はがん組織から血管内に遊離して血液中を循環し、多臓器へ定着してがんを発生させるインタクトながん細胞であり、乳がん、大腸がんなどにおいて予後との相関性が示唆されている。今回当教室では、米国 VERIDEX 社 Cell Search システムを用い、初回治療時および再発症例の婦人科がんにおいて CTC を測定し、臨床的予後因子との相関性を確認した。2010 年 2 月から 2011 年 5 月までに当院にて治療を行った卵巣がん 14 例、卵管がん 1 例、腹膜がん 3 例、腟がん 1 例、子宮頚がん 13 例および子宮体がん 23 症例に対し、Cell Search システムにて CTC を測定し、CTC 数と各がん腫における臨床進行期、組織型、術後進行期、再発の有無などとの相関性を解析した。CTC は全 55 症例中 12 例にて確認され、最低 0 個、最高 11 個であった。がん腫別では卵巣がん 3 例、卵管がん 1 例、子宮頚がん 3 例、子宮体がん 5 例で CTC を認めた。統計学的な有意差はないものの、卵巣がんは II 期以上、子宮体がんは III 期以上、子宮頚がんは IV 期と病期の進んだ症例において CTC は出現していた。また、臨床的予後因子との有意な相関性は認めなかった。婦人科がんにおいても CTC は確認でき、特に進行期の進んだ症例との相関性が示唆された。今後症例の蓄積を重ね、その予後と CTC との相関性を前方視的に確認する予定である。